

「悲しむ人々は、幸いである」

マタイによる福音書 5 章 4 節

聖学院キリスト教センター主事 木村 太郎

主イエス・キリストは、「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる」（マタイによる福音書 5 章 4 節）とお語りになりました。聖書の御言葉は、そのキリストの言葉が真実であることを証ししています。それは、キリストの弟子の一人であるペトロという人の姿を通してです。

ペトロはキリストの十二弟子の中の一番弟子でした。しかし、キリストご自身は、そのようなペトロがご自身の下から離れていくことを既にご存じでありました。

実際、そのことは起こりました。ペトロは、キリストが捕らえられ、裁かれると分かった、その裁判が行われる最高法院という場所まで行き、息を潜め、ことの成り行きを遠くから眺めるのです。しかし、その場に居合わせた人に、「あなたはイエスという人の弟子の 1 人ではないか」と問われた時、ペトロは自らを守るために、「そんな人は知らない」（26 章 73 節）と三度も打ち消したのです。ペトロはキリストを見捨てたのです。

ペトロはこの時、以前キリストがペトロに対してお語りになった言葉を思い起こします。それは、「・・・あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」（26 章 34 節）という言葉でした。ペトロは、キリストの言葉が実現したことに気づき、最高法院から「外に出て、激しく泣いた」（26 章 75 節）のです。

ただ泣いたのではありません。激しく泣いたのです。そして、外に出て泣いたのです。つまり、1 人で泣いたのです。ペトロは大きな挫折を経験します。1 人で困難を抱え、悲嘆に暮れます。

私は大学生の時、ある人の次のような言葉を知りました。「人間がだれはばからずしゃべることのできる、観念や思想や道徳や、そういうところで人間はだれも神様に会うことはできない。人にも言えず親にも言えず、・・・自分だけで悩んでいる、また恥じている、そこでしか人間は神様に会うことはできない」。

この人の言葉を少し言い換えるならば、悲しみや困難の中で、自分だけでもがき苦しんでいる只中においてこそ、神さまはその人に出会ってくださるということではないでしょうか。

ペトロは、後悔の思い、自責の念など複雑な思いの中で、孤独の中に落ち込みました。しかし、「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる」とお語りくださったキリストは、ペトロを見捨てることはありませんでした。そのどん底でペトロを捕らえ続けてくだ

さいました。そのことは、この後、ペトロが再び立ち上がり、キリストを宣べ伝える伝道者となっていたことから分かるのです。

様々な苦難にぶつかることがあります。大きな困難があり、一方で、他人からは見えない悲しみ、また、他人の目から見たら小さな取るに足りないことだと思われてしまう重荷があります。いずれにおいても私たちはそのようなものを抱え込み、悲しみ、涙を流すことがあります。

しかし、神さまはそこで必ず私たちに出会ってくださるのです。なぜなら、神さまは私たちを決してお見捨てにならず、自分だけで悩んでいる、悔いている、今の自分は惨めだとしか思えない、そういう私たちの姿を一つひとつぶさにご存じだからです。

その神さまの姿は、主イエス・キリストに示されています。ペトロを引き上げてくださった方です。「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる」とお語りになった方です。キリストは、悲しみと慰めの間に立ってくださる方なのです。心を高く上げ、その方を信じることにこそ、苦難を乗り越える真実なる力があるのです。

天の父なる神さま、あなたは私たちの全てをご存じであり、たとえこの自分 1 人しかないと思われる困難の只中においても、いつもそこにいてくださいます。どうぞ、その慰めを心に刻み続けることができますように。この祈りを、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

2020年10月7日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「苦難を乗り越える」